早くから観光に結びついた産業となっている。ミカンの山を下から見上げるのもよく、ミカンの木をすかして青い海を見下ろすのもよいが、ミカンをちぎるのは町に住む人にとってはもっとうれしいことである。水俣市は全市をウメで埋める計画だという。ウメは枝振りも花も美しいが、またその実は酒によし、菓子によし、薬にもなる。小国の杉の山も美しい。あの整然と植えられた杉山を、杉綾（スギアヤ）という織模様に見立てたほどに美しいのである。緑川や芦北の奥地には樹海がある。樹林を海に見立てたのである。阿蘇の波野は波打つ海に見立てた原野のことである。いずれも人が植えた木や草が美しいものであることをたとえたことばである。阿蘇の放牧の牛は、あの悠久の阿蘇にはかかせないものになっている。自動車道にねそべって警笛を鳴らしても動こうともしない風景は、のどかな一幅の絵ではないか。阿蘇の野にキジを放す計画があるそうだが、非常にいい考えだと思う、天草のたこの干したのも絵の題材として面白い。

ミカンを客にちぎらせたり、魚を釣らせたりするように、色々の産物を客にとらせることをもっと考えてみるべきであろう。たとえば、シイタケをとらせて焼いて食べさせるとか、ワラビをとらせてゆがいて食べさせるとかはどうだろうか。川越市ではサツマイモを掘らせるそうである。サツマイモが熊本の観光にそのままあてはまるかどうかは疑問だけれど、何か工夫すべきである。しかし、ミカン山で買うミカンが町で買うミカンより高かったりするようなことではいけない。産地で買うときはできるだけ安くしてもらいたい。安くなるはずである。天草真珠も現地で売ってもらいたい。貝を開かせて売るのもよい。

また、各地の民芸などを客に開放するのもよい。たとえば鹿本町のうちわなどは、半製品に客に描かせることはどうだろうか。高田焼、小借焼、水平焼など各地の焼物も客に描かせたらどうか。きじ車なども客の好みの色に塗らせてみたら面白い。

そしてまた各地のダムは人工の湖となろう。下筌、松原、花定野、天君、萩尾、羊角湾などはそれぞれ産業上の目的をもっているが、同時にそれは人工の自然美となりうるであろう。ここにボートを浮かべ、釣を楽しませ、魚を食べさせよう。内大臣橋も産業上の目的をもつが同時に観光対象となるであろう。

まず道路とルート……■

次は観光ルートの開発と整備である。観光客に同じ道を往復させるのは芸がない。そこで各地の観光地を歴訪できるルートを用意しておいて、そのどれかを選ばせるのがよい。こうするためには、せまい町村の区域の中だけで考えてはいけない。いやせまい県の区域だけでもいけない。少なくとも九州全域の中で考えるべきである。鉄道は自動車におされてはいるが、熊本県としては、日の影と高森を結んで宮崎県の観光と連結する他に、小国と菊池を結んで大分福岡両県と連結し、さらにできれば妻線をのばし、湯の前と杉安を結んで宮崎県と連結したい。

道路はなお重要である。熊本と一の宮町の間の国道は、大津、立野、坊中などをバイパスとする他に、豊肥線とは立体交差とし、さらに全線舗装する。しかもこれは急がねばならぬ。というのは、今

観光くまもと に一言

観光基本法も施行され、観光網や施設の充実が急務となったが、日本の自然の美しさをそこねてはならない——

ここ数年来、経済安定成長に伴う勤労者の余暇利用及び保健のための旅行の増加は目覚しく、世はまさに観光ブーム、レジャーブーム、バカンスムード。大都市や野や山、海に観光開発と観光客が溢れている。それだけ国民全体の所得水準が向上し、労働時間が短くなった反映であろう。

ところで、この様相に対しての観光開発が、場所によっては、非常な無秩序が生れており、それに対し万全の対策が緊要視されているところも多いと聞く。こうした時、昨年六月に観光界永年の懸案であった「観光基本法」が制定され、これまで各省でバラバラであった観光行政をはじめ関連する観光対策の総合化が図られたことは極めて意義がある。今後の課題はこの基本法の理念をどのように生かすかにあろう。

もともと観光事業は優れた観光対象であるわが国の自然景観や、文化財などを土台にして成り立つものであり、これら国家的、国民的遺産を保護し、時代に対応して管理、利用方法、施設を整え、美しい日本の国づくりという観点から、十全の施策を考えられなければならない。

わが県においても、おそ蒔きながら一昨年、昨年と引続き全県下に亘って観光診断が行なわれ、本年始めには観光審議会も設置され、正しい開発の方向にむかって前向きの姿勢がとられたことは、まことに喜ばしいことである。

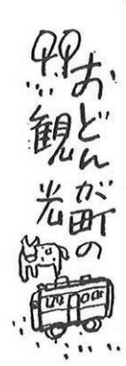
この十月始めには国際観光ルートの九州横断道路が開通し、天草架橋も現在工事が着々と進行中である。ただ基本として考えられるこれ等が完成しただけでも、新らしい観光地を求める最近の旅行客の、心理動向からして、ここ当分の間は異常なまでの観光客数が予想されるし、これに対応する宿泊施設も含めた観光施設の充実其他の対策は早急に、しかも慎重に樹立さるべきである。その際、心すべきは先にも述べた、美しい日本の国造りと云う観点から、観光地としてその土地全体が一つにまとまり、自然の環境を出来るだけ損ずることなく、周辺との調和を保ちつつ、すべての施設を整備拡充することが大切であろう。なお観光開発は道路の整備からと云われている通り、観光地でまず云々されるのは道路の良否である。また最近急速に発達しつつある航空機に対する空港の整備拡充もまた然りである。

観光開発は道路の整備から

栄口山

本県は世界的活火山〝阿蘇〟とそれに伴なう雄大な外輪山、また広大な草原、それらを取まく三十有余の温泉群、そしてキリシタンと夢の島天草など、観光資源にはこと欠かないが、それだけ従来はその上にあぐらをかいていた観がある。然し現在は横断道路と天草架橋によって観光状勢は一変しつつある。本県のもつ持ち味、特色を十二分に生かした総ての観光諸施設が完備された暁には、太陽とみどりの九州の中心に位する熊本の観光は、期してまつべきものがあろう。

（日本交通公社熊本営業所長）



一枚看板

〝瀬の本高原〟

＜阿蘇郡南小国村＞

北海道のそれとならび称される瀬の本の高原美、黒川温泉も目と鼻の先だ。それが、九州横断道路という一本の太い線でグイと押し出されてきたのだ。土地をめざして、業者が押し寄せてきたのは当然である。しかし、南小国村は慎重であった。ありきたりの観光施設で、宝ものの様な自然美がこわされることを避けたのである。類をみないスケールの大きな自然の景観を生かしながら、通過しようとする足を引きとめる方策を立てる。この基本方向がとられた。

開発の対象となる高原の殆んどが、村有地としてまとまっていることも、いわゆる総合的開発計画が企画される上に極めてよかったといえる。

日本で唯一の、自然の美しさと温泉を生かした、健康な大公園。これが観光南小国の完成図である。

峡谷美の中の温泉郷

＜阿蘇郡小国町＞

「杖立」は、小国町観光のすべてである。そして、この古い歴史をもつ県下有数の温泉地杖立も、新しい時代の要請の前に、大きな変貌をみせつつある。温泉地という〝点〟を、北九州、阿蘇、別府といった〝線〟とつなげるためには、国道二百十二号線の整備が焦眉の問題というわけ。事実、杖立の観光客の八割が北九州、関西方面という、いわば、〝北向き〟の顔は、〝線〟の問題があったからなのだ。

杖立のきめ手は、いうまでもなく豊富な温泉と、峡谷美であるが、自然の美しさを強調しながら、いわゆる設備の充実をはかり、しかも、独自のチャームポイントを打ち出したいところだ。関西方面の観光客が寄せてくる杖立評は、「静かな、美しい自然の懐にある温泉に魅せられてしまった。」というのが圧倒的だという。成功を収めつつあるようだ。

阿蘇の客を南へつなごう

＜阿蘇郡長陽村＞

小国町の顔が、どちらかといえば〝北向き〟なのに比べると、長陽村のそれは〝南向き〟といえる。つまり、阿蘇へ流入する観光客を南阿蘇へおろし、高千穂、延岡、宮崎へつなげようというのだ。むろん、道路整備が第一の課題。

湯の谷、戸下、栃木、地獄、垂玉と、の悪路はあのすばらしい横断道路の価値を半減するものだから。そしてここの杉並木は保存するだけでなく、欠げた所に補植をし、鉄道との間を歩道にするのがよい。阿蘇の北外輪スカイラインを設け、これをかぶと岩のあたりから菊池水源に結び、さらに菊池、山鹿、玉名をつらねて、長州からフェリー・ボートで雲仙にのばす。これは阿蘇谷の雄大さと菊池川の溪流と、城北温泉群を雲仙につなぐものである。高森と波野を結んで五岳周遊コースも整備しなければならぬ。天草にはやがて五つの橋がかかるので、三角と陸続きになるが、観光の面からいえば、下島の山中を通る国道よりも、下島の東海岸と西海岸を通る道路の方が重要である。上島も西海岸道路の方がよい。牛深から阿久根にフェリー・ボートで渡り、芦北海岸を北上し、佐敷あたりから球磨川の白石付近に抜けて人吉に上る。球磨川を川下りしたいならこれを逆にたどればよい。人吉のあたりから霧島に至って鹿児島県に入る。内大臣川沿いの林道はやがて、宮崎県の国見岳などの山岳地帯を、熊本県の緑川溪谷とつなぎ、さらに南郷谷ともつなぐものになろう。菊池と日田も結びたい。これらの道路はいずれも現在すでに通っているが、幅がせまく屈曲が多く、舗装されていない。それを整備するのである。ただし美しい風景が次次に変化するようなところは、あまり無理に直線化する必要はない。適度